

## I 学校の概要

アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業

高松市立古高松中学校

### ◆生徒数及び教員数

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
5学級 171名	6学級 190名	5学級 185名	2学級 5名	18学級 551名

○教員数 34名

### ◆学校の特徴

本校は、校訓である「自立・友愛」や、学校スローガンである「支えよう仲間を・高めよう自らを」のもと、生徒会役員が中心となり、「あいさつ運動」「校内ピカピカ大作戦」や「ボランティア清掃」などの、様々なボランティア活動に取り組む、明るく活気のある学校である。

しかし、以前は授業の成立が困難な時期もあり、現職教育では、授業を成立させ学力を高めることを目標に、教職員で授業を参観し合ったり、協議を行ったりし、問題行動があればチームで取り組む姿もあった。たとえば、「すっきり導入」「しっかり展開」「はっきり結論」といった一時間完結型の授業で生徒の集中力を高める工夫をしてきた。平成28年度に高松市の北ブロックの発表を行うに当たっては、全員参加の授業を目指し、「ユニバーサルデザイン」について研究に取り組み、現在も継続している。

## II 研究主題等

研究主題

### 言語を介して能動的に関わる力の育成

#### ◆研究主題設定の理由

平成28年度に引き続き、平成29年度も全員参加の授業を目指し、授業に「自分で意見を持つ時間」「話し合う時間」「発表する時間」を位置づけた。学力の定着状況では向上が見られたが、生徒の意識調査からは「話し合い活動」の充実が課題として残った。

そこで、平成30年度は、前年度の課題であった「主体的に学習に取り組む生徒の育成」のため、指導過程に「話し合う活動」を位置づけ、授業改善を図る。「話し合う活動」を通して、自分の思いや考えが相手に伝わる成功体験を味わわせることで、生徒の授業への主体的な参加を促す。また、平成33年度から全面実施される教育課程では、「主体的・対話的で深い学び」となるよう指導過程の質の向上が求められており、各教科において指導過程を工夫する必要がある。

## ◆研究内容及び方法

### 「伝える力」「話し合う活動」「フィードバック」

今、社会は急激な速度で成長を遂げており、そのため以前では予想もしなかった課題に直面している。それらの課題に対して、互いに協力し、よりよい答えを出していくために、教育が果たすべき役割が変わってきている。これからはますます、思考力・判断力及び表現力が重要視され、知識を活用することが大切となる。また、どのような知識を得るかではなく、何のために学ぶのかといった、学びの転換も図られている。

研究の方法については、授業構成を工夫し、「個人で考える時間」「班で話し合う時間」「発表する時間」を設け、そこに「話し合う活動」を設定することで授業改善を図る。

「話し合う活動」とは、相手を理解しようと、自分が気になることを尋ねて相手の考えていることを引き出すことや、相手を理解し、相手に「伝わる」ことをねらいとする。

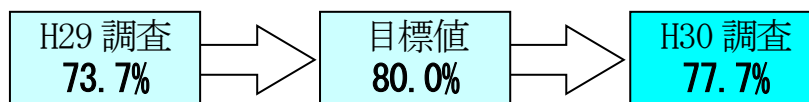
また、「フィードバック」についても、従来のように学んだ内容や方法をまとめるだけでなく、たとえば「相手に伝わるように説明ができた」や「相手に分かったと言われた」など、本時でどのような力がついたかという点に着目させ、実感を伴う「フィードバック」の場を作る。

## III 研究実践

### ◆指標設定と達成に向けた取組

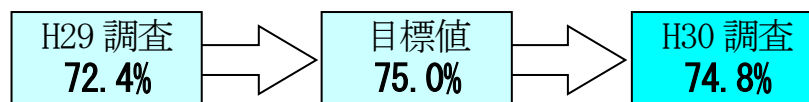
5 (生徒質問紙) 学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 「①よく分かる+②だいたい分かる」の合計



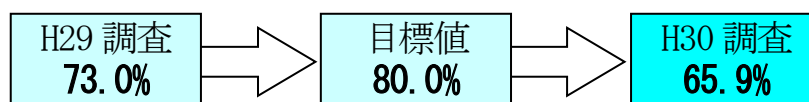
9 (生徒質問紙) 友達の話を聞き、分からないところや知りたいことを質問しようとしていますか。

指標 「①はい+②どちらかといえばはい」の合計



10 (生徒質問紙) 友達の話を聞き、分からないところや知りたいことを質問することができますか。

指標 「①はい+②どちらかといえばはい」の合計



12 (生徒質問紙) 説明したときに、友達に納得してもらってうれしかったことがありますか。

指標 「①はい+②どちらかといえばはい」の合計



### 指標の達成に向けた実践

#### (1) 教員研修

「訊き合う活動」「フィードバック」とは何かを教員が理解するために、主に現職教育の時間を利用し、説明やワークショップ等を行った。

#### ・ 6月 公開授業

国語科で2本、公開授業を行った。その中で、質問、確認などを行う「訊き合う活動」や、自分の意見をリライトする「フィードバック」を行った。

#### ・ 8月 「訊き合う活動」設定の理由説明、ワークショップ

交流活動において、互いに伝えたつもりになっていることや、返答がないため発表者が不安になることから、「訊き合う活動」を通して質問、確認を繰り返すことの大切さを再確認した。「フィードバック」では、単なる内容の理解に留まらず、自分の学びの過程を捉えることが大切であることを説明した。また、実際に「訊き合う活動」を行い、体験的に理解できるよう努めた。

現職教育後の感想では、「質問をし合うことで、深く思考できるという体験ができて良かった」「『訊き合う活動』について理解が深まった」など、肯定的な意見が出る一方で、「生徒に落とすのは難しい」「抽象的である」「自分の教科にどう生かせるかをこれから考えていかないといけない」など、実践の難しさを感じる感想もあった。

#### ・ 9月 「訊き合う活動」実践後に生じた疑問と答えの交流

9月には、校内で授業公開が行われ、「訊き合う活動」「フィードバック」を意識して各教員が授業を行ったが、そこでは交流する中で伝えることや質問することの難しさなど、多くの課題が見られた。そこで、Q&A集を作り、「訊き合う活動」「フィードバック」の定着を図った。

#### ・ 10月 校内研究授業、香川大学岡田先生による講演、「訊き合う活動」のルール化 各教科で「訊き合う活動」をどのように取り入れるか、質問事項の検討

10月には校内で研究授業が行われた。数学科、英語科、家庭科で、「訊き合う活動」「フィードバック」を入れて授業を行った。香川大学の岡田涼先生をお招きし、アクティブ・ラーニングについて、また古高松中学校の取り組みについて全体会でご講演をいただき、指導主事にもご参観、ご指導をいただいた。

また、現職教育の時間を使い、交流活動において必要な力として「伝える力」を定義し、「訊き合う活動」のルール化を行った。各教科では、具体的にどの場面で「訊き合う活動」を行うと効果的なのか、また「訊き合う活動」中に質問する助けとなるよう、「質問シート」を作成するなど、普及に努めた。

- ・ 11、12月 「香川の教育づくり」に向けて、研究のまとめ  
「香川の教育づくり」での発表に向けて、「伝える力」「訊き合う活動」「フィードバック」について、改めて確認し、方向付けを行った。
- ・ 1月 公開授業  
国語科、理科、社会科、音楽科、それぞれで「訊き合う活動」「フィードバック」を入れて授業を行った。参観者は、授業記録用紙を用いて授業を参観した。また、それぞれについて分科会で議論し、ご参観いただいた指導主事からご指導をいただいた。

授業記録用紙

「訊き合う活動」「フィードバック」について  
10月の岡田先生のご講演を参考に、振り返り  
用紙を作成した。  
項目を細分化することで、見る視点を限定し、  
共通理解・共通実践に努めた。

授業記録用紙					
期 学年 組 科 H31年 月 日 ( ) 校時					
授業者( )		記録者( )			
授業改善の視点		評価(4まで)			
訊き合う活動 フィードバックの 具体	座席の指示がある。(4人を原則とし、机を合わせたり体を向けたりすること)	4	3	2	1
	ホワイトボード等を使い、話し合いの流れを可視化している。	4	3	2	1
	時間を細かく区切るなど、質問する場を意識的に設定している。	4	3	2	1
	どのような質問をすればよいかについて、観点や話型を示している。	4	3	2	1
訊き合う活動の 評価	生徒が学びの過程を振り返る機会を設けている。	4	3	2	1
	交流の中で認知的葛藤が生じて解消するようになっている。	4	3	2	1
	生徒にとって交流の必然性がある。	4	3	2	1
フィードバックの 評価	お互いの思考過程に注目できるようになっている。	4	3	2	1
	自分の進歩したところを自覚できている。	4	3	2	1
	それぞれの授業の流れの中に位置づけて捉えている。	4	3	2	1
感想等					

(2) 「訊き合う活動」のルール化

- ・活動人数を指定する
- ・話し合いの流れを可視化する
- ・質問・確認の場を意識的に設定する
- ・質問の際の観点や話型を示す

「訊き合う活動」を全教科で取り組むにあたり、上の4つのポイントを掲げた。

- ・ 活動人数を指定する  
人数が多すぎると発言する機会が少なくなり、聞き手が増えるため一人一人の責任も軽くなる。また、誰と話すかを明確にしないことで、話し合いに参加しない生徒や、分からないことがあってもそのままにし、別の級友と話す生徒が見られた。  
そこで、誰と話しているかを明確にさせる。それにより、聞き手が責任を持ち、分からないことがあれば質問するなど、能動的な態度を養うことにつながると考えた。
- ・ 話し合いの流れを可視化する  
交流活動において、話し言葉はすぐに消えてしまい残らないため、今までに何が決まって、今何について話し合いを深めているかを可視化することが大切であると考えた。
- ・ 質問・確認の場を意識的に設定する  
話し合う時間を大きく取っても、それぞれ発表するだけになりかねない。「Aさんが発言する時間」「質問する時間」「議論する時間」「Bさんが発言する時間」など、細かく時間を区切り、何をするかを伝えることで、やる事が明確になると考えた。
- ・ 質問の際の観点や話型を示す  
「質問をしよう」「気になることを聞こう」と言われても、何をどう聞けばいいかわからない。そこで、質問をする上での観点や、質問の例文を作った。

(質問をする上での観点)

『「話し合う活動」の手引き』社会科

班員の発表が分かっているかどうか、また深まるように、次の表を参考に「質問」「確認」をしましょう。

「質問」

- ・発表の内容で分からない言葉があったか?

「〇〇ってどういう意味?」

「〇〇がよく分からなかったから、もう一度説明してくれないかな。」

Q. あなたなら、どちらを選択しますか?  
→その根拠は何ですか?

Q. 賛成しますか、反対しますか?  
→その根拠は何ですか  
違った意見・反論はありますか?

Q. あなたなら、どうしますか?

「確認」

- ・自分の理解は本当に正しいのか?

「〇〇ってことが言いたいんだよね。」

「〇〇ってことかな?」

- ・自分の主張は本当に伝わっているのか?

「どう思った?」

「わからない表現はあった?」

『「話し合う活動」の手引き』国語科

班員の発表が分かっているかどうか、また深まるように、次の表を参考に「質問」「確認」をしましょう。

1 【質問】分からないところ、気になるところは発表者にどんどん訊こう。

- 発表の内容で分からない言葉があったか。  
→「〇〇ってどういう意味?」  
「〇〇がよく分からなかったから、もう一度説明してくれないかな。」

**主張について**

- 言いたいことや考えが分かったか。  
→「言いたいことって何?」「つまり、どういうこと?」
- 言いたいことや考えが想像できるか。(具体性)  
→「たとえば、どんなこと?」「〇〇ってことでいい?」

**理由について**

- 理由が述べられているか。  
→「どうしてそう思ったの?」「理由は?」
- 理由と言いたいことがつながっているか。  
→「それって、言いたいこととつながっている?」  
「理由と言いたいことが〇〇な点でつながってないよね。」
- 理由について、納得できたか  
→「それって理由になるかな?」「〇〇なところが××で納得できないんだけど、説明できる?」
- 理由について、想像できたか(具体性)  
→「たとえば、どんな場面のことかな?」「〇〇っていうこと?」

**根拠(事実)について**

- 根拠が述べられているか。  
→「どんな根拠から、それが述べられているの?」「どこに書いてあるかな?」
- 根拠と言いたいことがつながっているか。  
→「その根拠、事実から、どうしてそういう考えになるのかな?」  
「その根拠と言いたいことは、どうつながっているの?」
- 根拠と理由がつながっているか。  
→「事実と考えとはどうつながっているの?」  
「根拠と理由とは〇〇な点でつながっていないように思うけれど」

2 【確認】自分が理解したと思っても、誤解していることはあるから、確認しよう。

- 自分の理解は本当に正しいのか?  
→「〇〇ってことが言いたいんだよね。」「〇〇ってことかな?」  
(相手の発表を、自分の言葉で言い換えてみよう)

3 【発表者の質問、確認】自分の考えが伝わっているかを確認しよう。

- 自分の主張は本当に伝わっているのか?  
→「どう思った?」「わからない表現はあった?」

IV 研究の成果と課題

◆研究実践における主な成果と課題(今後の研究内容)

「話し合う活動」「フィードバック」についての共通理解を図り、共通実践を行った。特に「フィードバック」については、結果ではなく過程を振り返るということに重点を置いて取り組んだが、学び方に関する約束事や指導の手立てが不十分であったと考える。

一方、校内での共通実践を通して個々の生徒に変容が見られるようになり、分からないことを「話し合う」ことが大切であるという意識が広がってきたこと、学び合いの中で学習意欲の高まりが見られるようになったことが成果であるといえる。

香川大学岡田先生から、(1)内発的動機付け (2)メタ認知 (3)協同学習 (4)自己調整学習次の4点の内容について講話をいただくとともに、本校の研究内容についても次のような指摘があった。

- ① どうしたら話し合う活動ができるか(=話し合う活動って何?)
- ② どうしたらフィードバックができるか(フィードバックを得ているといえるのはどんな状態?)

<①に関する指導の改善ポイント>

- 生徒にとって課題が興味や重要性を感じられるものになっているか?
- お互いの伸びや成長を意識しているか?
- 交流の中で認知的葛藤が生じて解消するようになっているか?
- 生徒にとって交流の必然性があるか?
- お互いの思考過程に注目できるようになっているか?

<②に関する指導の改善ポイント>

- 導入時点で自己評価ができているか？
- 導入時点で目標を持ってしているか？
- 生徒自身が学習の過程や思考の変化に目を向けているか？
- 自分の進歩したところを自覚できているか？
- それぞれの授業の流れの中に位置づけて捉えているか？

これらの視点をもとに具体的な授業改善に取り組み、実践を積み重ねていく必要がある。

◆質問紙調査の分析（個の変容）

「話し合う活動」「フィードバック」を通して、「5 学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。」の項目で5ポイント伸びが見られた。「12 説明したときに、友達に納得してもらってうれしかったことがありますか。」の項目も約4ポイント伸びている。交流活動で、伝わったという体験を繰り返すことで、生徒が交流活動を意味のあるもの、自分の考えの深化・拡充を図るものであると捉えたことが分かる。

また、「9 友達の話聞き、分からないところや知りたいことを質問しようとしていますか。」もポイントが上がっていることから、質問して理解したり、相手の意見を深化・拡充させようとする意識が高まっていることが分かる。しかし、「10 友達の話聞き、分からないことや知りたいことを質問することができますか。」は7ポイント程度下がっている。質問する機会が増えたため、質問はしようとしているが、何を質問すればよいか分からない生徒の様子が伺える。

◆次年度の研究実践に向けて

- ・ 本年度の研究を通して、「学習集団の一人ひとりの成長が互いの喜びであるという目標のもとで学習すること」の重要性を共有した。今後も互いの成長を喜ぶ集団づくりを具現化し、学び合いの質を高めるために、相互交流の場面では「質問」だけでなく、自分の発表が分かったかという「確認」を取り入れた実践に取り組んでいく。
- ・ 香川の教育づくり発表会において、「交流活動では、『こんなことを言っても大丈夫か』という学級の雰囲気も大切であると思う」という意見をいただいた。「話し合う活動」の実践を支える学級の支持的風土についても大切に考えていきたい。